



企画にあたって

小保方 優

(群馬大学大学院医学系研究科内科学講座循環器内科学)

心血管系は動的な器官であり、運動などのストレス時にその機能を亢進させる“予備能”をもっている。つまり、心拍出量を増加させて、肺で取り入れた酸素を活動筋に送る。そして、この心血管機能の亢進には両心室充満圧や肺動脈圧の異常な上昇、肺うっ血は起こらない。一方、心不全、弁膜症、心筋症、肺高血圧症、虚血性心疾患など種々の循環器疾患ではこの心血管予備能が低下しており、運動時に心内圧の上昇、肺うっ血、心拍出量の上昇の制限があり、労作時呼吸困難や運動耐容能の低下につながる。

負荷心エコーは心血管系に「揺さぶり」をかけることで、安静時には同定できないこの心血管予備能の異常を顕在化させることができ、特に疾患の早期診断やリスク層別化に有用であることが示唆されている。歴史的には負荷心エコーは虚血性心疾患の検出に用いられることが多かったが、最近では特に心不全や弁膜症、肺高血圧領域での発展が期待されている。

本特集では、負荷心エコー領域のスペシャリストが負荷心エコーに関する必須知識の整理、疾患ごとの方法論、さらに負荷心エコーが特に期待されている疾患の最新の知識を読者と共有する。これによって、本企画が日常臨床で負荷心エコーを最大限利用するための一助となることを期待したい。